

子育て支援住宅にみる脱nLDKの住まい方の可能性

脱nLDK 子育て支援 住まい方
開放化 勉強部屋 家族観

正会員 ○ 井上 佳保 *
同 横山 俊祐 **
同 徳尾野 徹 ***

1. はじめに

nLDK型の住戸プランでは、「プライバシー重視による個室の閉鎖化や拠点化」「ライフスタイルや家族構成の変化に対応できない」などの問題が指摘されている。

これに対して、少子化を背景に供給されている子育てに配慮された住宅(以下、子育て支援住宅)では、家族相互の関係を積極的に生み出そうとする試みや、ライフスタイルにあわせる可変型のプラン等が提案されており、nLDK型の課題を乗り越える可能性を有する。

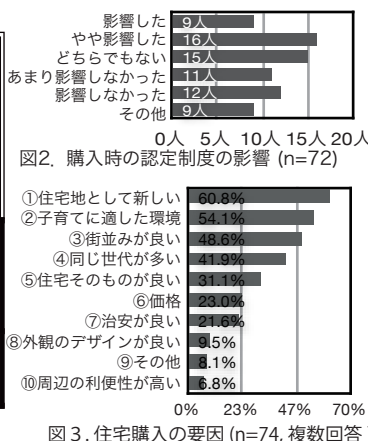
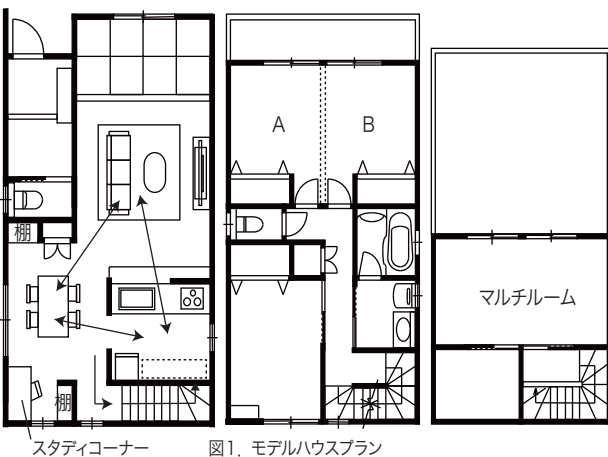
本研究では、子育て支援住宅を対象にnLDK型とは異なる住まい方や親子の新しい関係の可能性について検討する。

そのために子育てにやさしい住まいと環境^{※1}に認定されている大阪府の住宅街から平面計画に特徴のある戸建住宅地の2地区を対象に、住まい方に関するアンケート調査を行った。(回収率:50%)また、了承を得た5世帯を対象に戸別訪問によるヒアリング及び住まい方調査を行った。

2. 子育て支援住宅の内部構成の特性と購入動機

対象地の子育て支援住宅の平面計画の特徴は①2Fの個室に行くためには必ずリビングを通るようにした動線計画(リビングイン階段)②LDK空間、畳コーナーなどの多様な居場所がひと続きになっており、相互に見渡せるような配置計画③水回りを2Fに配置して、公室にゆとりをもたせ、スタディーコーナーや畳コーナーなど多様な居場所を設置④入居後10年後もしくは15年後に無料リフォームが実施され、A、Bの個室が可変型のプラン計画⑤3階に配置された用途を限定しないマルチルームが挙げられる。

上記の特徴を有する子育て支援住宅の認定制度そのものが住宅購入に影響したのが4割程度を占め、認定制度は一定程度、斟酌されている(25/63, 図2)



しかしながら、住宅購入の要因としては住宅そのものよりも、住宅地としての新しさや、子育てしやすい住環境、街並みや同世代の多さ等、外的要因が多い(図3)。そのため子育て支援住宅の居住者は、特に子育てに配慮したプラン・計画に注目したという訳ではないと考えられる。一方、実際に住んでみた時の子育て支援住宅の評価は、子育てのしやすさや内部の開放性による家族間の関係が特に高い評価を得ており、入居して初めて子育て支援住宅の計画の特性を認知し、享受したといえる(図4)。

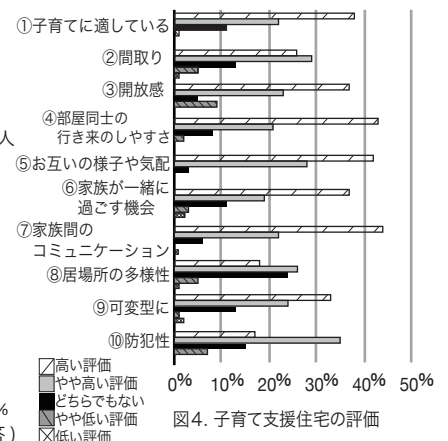
3. 住まい方の特性

1) L・Dの使われ方

Lの使われ方は、「テレビを見る・食事・団らん・遊ぶ・接客・読書・勉強・PC・昼寝・睡眠」であり、Dは「食事・遊ぶ・リビングと一緒に・PC・勉強・接客・書き物・テレビを見る」であり、住まい方が多様に展開している。また、LとDとの使われ方の差はほとんどないといえる。これは境界を感じない(表3(a):以下(アルファベット)は表3のコメント番号に対応)に見られるように、LとDを一体として捉えているからである。また、ダイニングテーブルを置かないなど、広さに対する欲求が強く、計画意図を尊重した住まい方が実践されている。合わせて子どもの遊び場や勉強場所として多様に、そして積極的に活用されており、生活行為の開放化の動きが見られる(b)(c)(d)。

2) 子どもの勉強場所

子どもは主にL・D・個室で勉強することが多く、なかには和室(畳コーナー)や廊下で勉強する家庭もある(表1)。L・Dで勉強するのは、親が勉強の面倒や様子を見る、監視する、雑多な中で集中力を養わせるために、個室では勉強させないといった考え(h)によるものである。しかし、子どもの自立を促す為にL・Dではなく個室で勉強させるなど、親の考



え方によって勉強場所に違いが見られる。

子どもの年齢別に見ると、小学校低学年の子どもでは、L・Dで勉強する世帯が多く、逆に個室で勉強する子どもはほとんどいない(12世帯中1世帯)。一方、高学年以上の子どもでも、低学年と同じような割合でL・Dで勉強するとともに、個室でも勉強するものが増えてきている(12世帯中9世帯)。これは、高学年になるにつれて自分の個室が与えられるため、個室が勉強場所になるといえるが、低学年と比べてL・Dの割合にほとんど変化が無いことから、子どもの居場所が多様化し、従来個室一辺倒だった勉強場所が開放化される傾向が伺われる。

4. 住まい方の開放化・関係化

2階の廊下で子どもに勉強をさせているIさんの家庭(図4)では、家族構成は30代夫婦、長男(9才)、長女(7才)、次男(5才)、三男(1才)、四男(1才)の7人家族であり、人数が多い。2階の3畳の書斎は、夫が仕事やPC、勉強、読書をし、それ以外の個室は夫婦の寝室と子どもたちの部屋になっている。子どもたちの部屋は子ども全員で寝る、遊ぶ場所になっているが、子どもの勉強は廊下に取り付けた机であるため、吹き抜けを通して家族全体の居場所を感じられる計画になっている。家族が相互に気配を感じ、吹き抜けを通じた会話など、積極的に意思疎通を図れるような住まい方をしている。個室は寝るだけを想定(m)、家族間のプライバシーは保たない(n)圧迫感の無いように高さのあるイスや机は置かないようにしている等、子どもが個室に閉じこもらず、開放的で子どもの居場所が多様に展開するような住まい方の工夫や考えがある。その結果として子どもの勉強場所が廊下という場でも成立し、このことがさらに家族間のコミュニ

表1. 子ども勉強場所

リビング	D	個室	和室	廊下	世帯数							
○	○	○	○	○	45							
○	○	○	○	○	21							
○	○	○	○	○	25							
○	○	○	○	○	6							
○	○	○	○	○	1							
1	4	1	1	2	8	7	1	3	1	20	2	8

表2. 第一子の年齢と勉強場所

第一子の年齢	L	D	個室	和室	廊下	世帯数
6~8才	○	○	○	○	○	5
(11世帯)	○	○	○	○	○	1
	○	○	○	○	○	2
	○	○	○	○	○	1
	○	○	○	○	○	1
8	5	1	2	0		
9~13才	○	○	○	○	○	1
	○	○	○	○	○	2
	○	○	○	○	○	4
	○	○	○	○	○	1
	○	○	○	○	○	1
	○	○	○	○	○	1
9	4	9	2	1		

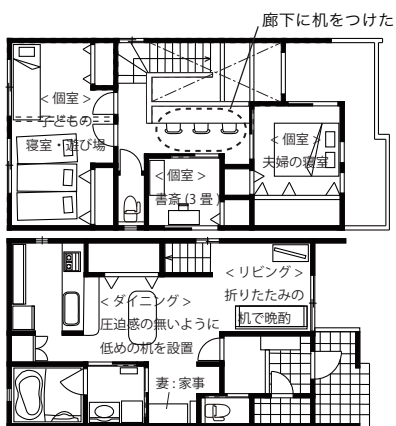


図5 2階廊下の勉強スペース

ニケーションを誘発している(w)。

他にもプライバシーの観点、特に子どもの性別を要因として「個室=個人の間」とする考えがある。しかし個室が子どもの拠点にならないような工夫(y)や使用しない(k)(l)等、閉じこもらないようにしたいとの意識がある。

内部全体ではリビングイン階段にみられるように家族が顔を合わす機会を増やし(n)(s)、家族の誰かが孤立しないような住まい方への意識が見られる。一部では、閉じこもらないようにドアを開放したり(u)、個室の使用をできるだけ避けるような、「個室=個人の間」を否定するような姿勢や、「個室」を外に開いていこうとする姿勢が見られ、家族相互の関係を作り出そうとしている。

5. まとめ

nLDK型のプランではプライバシーの観点から個室は個人の間として想定されている。一方、子育て支援住宅における住まい方をみると、ゆとりあるLやDは、その使われ方を多様にし、勉強場所をはじめとする子どもの居場所は家族の気配を感じられ、できるだけ親の目が届くよう展開されており、個室の持つ「個室=個人の間」の認識が崩れ、個室が開けている。このような住まい方は、住宅購入時に外との関係を重視し、内部構成に特に注目していない子育て世代で展開されていたことから、開放的な家族観や住まい方を希求する特別の家族に限定された住まい方ではなく、今日の子育て世代に普く受容されるものと考えられる。

表3. ヒアリング及びアンケートの自由記入

リビング・ダイニング
(a)リビングもダイニングも境界がないように感じます。ダイニングテーブルも置いてなくて、子どもの遊び場みたいに使っています。
(b)ダイニングは広く使いたくてダイニングテーブルを置いていない。
(c)ダイニングテーブルはずっと置かないつもり。置いてしまうと、使い方が制限されてしまう。
(d)何をやる訳でもないけど、できる限りを置かず、広く使いたい。気持ちがいいし、掃除が楽だから。
(e)ダイニングテーブルは高さがある分狭く感じるの、普通の机置いて、みんなで食事している。
(f)ダイニングには二人向けのテーブルを置いて勉強させている(一番したの子どもが邪魔にならないように)。食事はこたつでして、(リビングの)3人がけのソファで夜は夫が寝てます。
(g)小学生はリビングで、中学生は個室で勉強させたい。
(h)家族が居るリビングやダイニングで勉強することで、物音など周囲を気にしない集中力を付けたい。
個室
(i)個室を与えるのは娘のみでよい。男の子に個室は必要ないと思う。
(j)子どもが個室を持つと、居心地が良いからそこにずっと居てしまう。そうならないように子供部屋にはテレビの配線は引いていない。
(k)二階へ行ってしまうと何をしているのか分からないので子供部屋は一応あるが、実質使っていない。
(l)個室を与えるのはいつでも良いと思いますが、個室に鍵は不要だと思います。でも子どもの物を置く為の部屋は必要。でも、その部屋はあまり使っていない方が理想です。
(m)机は置くつもりがなく、寝るだけを想定していた。
(n)布団で家族全員で寝てます。布団は引きっぱなしなんで、家族が寝る部屋としてだけ利用してます。
(o)ベッドは狭くなるので置かない。置いてしまうと寝室としてしか使えない。色んな使い方をしたい。
(p)あんまりものは置きたくない。できるだけ広く使いたい。
(q)子ども2人の勉強机は迎え合わせにしている。それが一番広く感じ、机の上も明るくなるので。
家族関係
(r)リビング内に階段を設けることにより家族の顔を合わせるきっかけを増やしている。
(s)2Fへ上がる階段はLDを通して上がるようになっていたことが1番の希望でした。
(t)家族間で過度なプライバシーは必要ないと思っている。逆にプライバシーが必要になれば、自立して一人で住めば良いと思っている。
(u)夫の母と同居しているのでなるべく一緒に過ごせるよう、部屋のドアを閉めっぱなしにしないようにし、家の中で誰かが孤立しないようにしています。
(v)小さいうちは、兄弟で過ごす時間を大切にしたいので、同じ部屋にしている。
(w)子どもは(勉強)見てほしいと思う部分もあると思う。個室に机を置いて、勉強する場所を作っても結局そこでは漫画の本読んだり、自分の宝物直してたりだとか、そういう部屋になる。勉強するときは逆に、こういうところ(2Fの廊下)とか、誰かそばに居る中であってもいいこうでもないっていつの間にか以外にちゃんと勉強している。一人やったら誘惑に負けると思う。子どももわからなかったら「わからん」って廊下から叫ぶので、様子分かって良い。

* 大阪市立大学大学院工学研究科 前期博士課程
 ** 大阪市立大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)
 *** 大阪市立大学大学院工学研究科 准教授・博士(工学)

Master Course, Graduate School of Engineering, Osaka City University
 Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr. Eng
 Assoc Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr. Eng